

「ノーベル化学賞(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

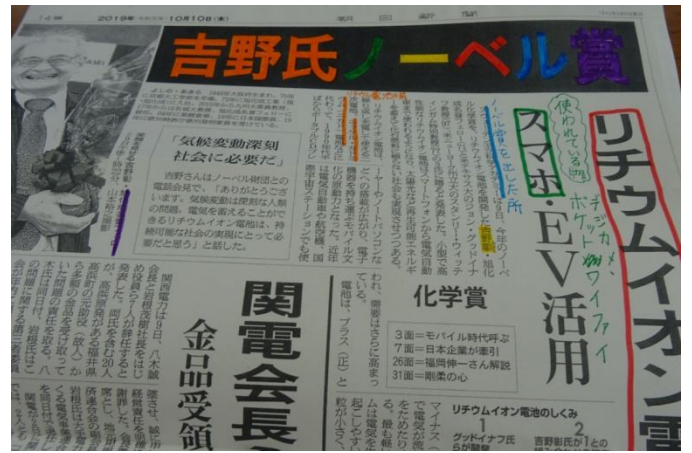
2019年のノーベル化学賞の発表があった。受賞したのは日本人の吉野彰氏ほか2名の研究者。翌朝の新聞一面記事は、受賞の栄誉で飾られていた。



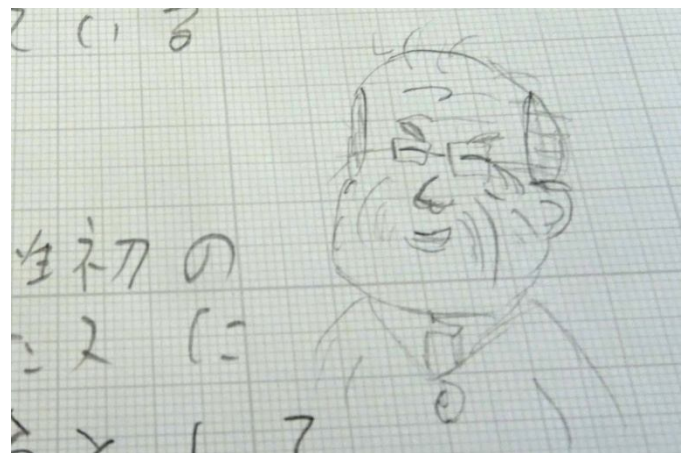
私はこの記事をコピーして、6年生の授業で配布することにした。記事には吉野氏のプロフィール、受賞したのは「化学賞」であること、リチウム・イオン電池の開発で受賞したこと、賞金900万クローネ(約1億円)のことなども詳しく書かれている。そのすぐ横に、関電役員が金品1億円を受領した記事が載っていて、誠に対照的だった。



私は身近にあった、リチウム・イオン電池を集めて、授業で見せることにした。ノート・パソコンの電池、携帯用プリンターの電池、ポケットWiFi、スマホ充電器などだ。比較のために、充電できないマンガン電池やアルカリ電池も置いてみた。実にさまざまな機器にリチウム・イオン電池が使われていると実感できた。



新聞記事を配ると、見出しに色を塗ったり、記事の大切な部分に線をひいたりしていた。この受賞に子どもたちが高い関心を示していることがわかる。



「吉野さんの笑顔が素晴らしい」と言う子どもも多く、中にはノートに「似顔絵」を描く子どもまでいた。なかなかよく似ている。



(2ページ目に44面印刷用画像あり)

私は「賞カード」というものを作って、毎時間子どもたちのノートに貼っている。A4用紙に44面印刷ができるシール用紙に印刷するのだ。登場するのは、科学史に登場する学者や、日本のノーベル賞受賞者などだ。顔写真と、簡単な功績が書かれている。現在30種類ぐらいあって、子どもたちの「コレクション」にもなっている。今日はさっそく「吉野 彰賞」を作って、授業後にノートに貼らせることにした。

